

保育者養成における音楽表現力育成の一試み —園児との「音楽交流会」を通して—

富田 英子

「保育ゼミ」の授業では、学生の自主性を高めながら音楽との関わりを深め、個々の感性を磨くとともに豊かな表現力、応用力を養うという視点に立ち、園児との「音楽交流会」を企画・実施している。平成21年から23年度取組における学生の主体的関わりや学習過程と育ちを踏まえ、体験的学習としての「音楽交流会」が学生に与える教育的効果や意義等実践報告を行うとともに、今後の課題を含め総合的な音楽表現力育成の方向性について検証する。

キーワード：保育ゼミ、体験的学習、子ども、音楽、総合的表現

1. はじめに

保育の現場において、創造的な音楽的要素を含む表現活動が子どもの手によって自由に繰り広げられているが、保育者が子どもの自由な表現活動と関わる際、保育者自身にその活動を柔軟かつ適切に受けとめ発展的に援助できる指導力がなければ、子どもの感性や表現をより伸長させることはできない。保育者の感性や音楽的表現力、創造性が豊かであることが大切なことは言うまでもないが、子どものつぶやきや行動の中に音楽の芽を感受できる力を培う必要性がある¹⁾。

保育者養成において、とくに短大では2年という短期間に、保育の場で必要な実践力や応用力、子どもの実態に即した音楽的援助ができるための知識、技能を体験的に獲得することが必要とされている。加えて、学生の音楽の捉え方や音楽に対する概念、音楽観を拡張することが望まれるが、そのための方法のひとつとして、学生自身が自ら関わる「主体的に経験を積む体験

学習」に効果を求めることができると考える。「体験的学習」を重ねる授業方法は、主体的学習態度の育ちを養成することにつながり、学生の専門的力量を高めることに大きな期待が持てるのではないだろうか²⁾。

音楽関係科目で学習した教材を様々な形で活用したり工夫したり、学習内容を総合的に応用して実際の・実践的な音楽活動へと発展させていくためにも、まず学生自身が「体験的学習」を重ねることが大切である。

筆者は、「保育ゼミ」の授業において、学生自らが授業に参画し、ゼミ運営のすべてに学生が関わるという学生主体の「体験的学習」を中心とした授業内容を展開している。乳幼児の発達段階に応じた様々な音楽活動を通して、楽しさや喜びを体験し、多様な音楽表現を理解するとともに、保育の中で取り扱う教材やそれらを展開するために必要な知識や技能、表現力を身につけることを目標におき、2年間の集大成として園児との「音楽交流会」を企画、実践を試みている。本研究では、「音楽交流会」の取組における実践経過を報告するとともに、その教育的効

果を検討、このような取組の意義や今後の方向性について考察する。

2. 授業の概要

「保育ゼミ」は、本学独自の演習科目として、学生個々の得意分野を深め主体的な学びの力と実践力を身につけることを目標に、平成20年度より2年次の卒業必修科目として開設された。

シラバスにおける授業の概要は、「興味・関心を共有する仲間と共に、保育に関するテーマや課題について学び、研究・深化させる。卒業必修科目であり、卒業研究の位置づけも含まれることから、2年間の学びの集大成として学習報告や研究発表なども課す」³⁾となっている。

筆者のゼミ（以下「Tゼミ」）では、「乳幼児の音楽表現活動」というテーマで、乳幼児の発達などに応じた音楽表現活動の指導や援助の方法を研究することとしているが、前述の通り、学生参画型のゼミのため、年間の活動計画等については全て学生の手にて委ねられており、担当教員である筆者は、必要に応じて学生の表現に適切な示唆や支援を行う助言者として関わっている。

「音楽交流会」については、平成21年から、もうひとつの音楽系ゼミであるFゼミと合同で企画・実施しているが、本稿では平成21年から23年の3年間に焦点をあてることとする。会場は、音響・照明等の設備が整った本学ホールである。

(1) ゼミ学生の特徴

全体としては、音楽学習経験等の差異や得手不得手はあるものの、音楽に興味・関心を持ち、さらに音楽との関わりを深めたいと自主選択により集まった学生達である。しかしながら、クラスも違い、初めて顔を合わせた学生もいる集

団である。各年度別の特徴は以下の通りである。

①平成21年度（ゼミ生20名）

音楽技能面での力量に差が見られるものの、リーダーシップのとれる学生が多く、その学生達を中心となり、あらゆる場面で指導力を発揮し全体をまとめる。何事においても目標を高く設定し、チームワークを大切にしながら、練習から本番に至るまで計画的、意欲的に取り組む。

②平成22年度（ゼミ生16名）

音楽技能面、意欲面等バランスのとれた学生が揃う。とくに、リーダー性のある学生がいるわけではないが、一人ひとりが責任ある役割を担い積極的に関わる。練習から本番に至る過程においても熱心に取り組む。

③平成23年度（ゼミ生20名）

音楽技能面、意欲面で若干の温度差が見られたが、個人ではなくグループ単位で役割を決め、各グループリーダーのもと活発に取り組む。吹奏楽経験者が多く、音楽面においてはこの学生達が遺憾なく力を発揮し、全体をまとめあげる。

(2) 前期の活動内容

年度によって多少の違いはあるものの、基本的には表1⁴⁾に示す通りである。前期前半については、器楽合奏・歌唱・手遊び等を中心に、学生による教材選択で表現活動を行い、音楽による他者とのコミュニケーションを図りながら、自ら音楽表現の楽しさを体験する。同時に、8月初旬に行われるオープンキャンパスでのコンサートに向けてのプログラム内容も視野に入れての取組となる。

後半になると、表2⁴⁾のようにオープンキャンパスにおけるコンサートに向けての練習が中心

となるわけだが、最初は安易に楽観的に考えていた学生達も、授業時間が残り少なくなり本番が近づくとつれ、完成度の低さに不安と焦りが生じ授業時間外の練習計画を立案、授業の空き時間に加え前期試験の合間を縫って練習時間を確保するなど、集中的に全体練習を行う熱心な取組が見られた。

表 1 前期授業内容

授業回数	主な活動内容
1	前期ゼミ内容について検討、計画立案
2～6	器楽合奏・歌唱・手遊び等練習、発表
7	オープンキャンパスにおけるコンサートのプログラム検討及び確定、役割分担、練習計画立案
8～12	個人・グループ・全体練習（必要に応じて小道具類製作、進行台本等資料作成）
13～15	リハーサル

表 2 オープンキャンパスでのプログラム

平成 21年度	1. おひさまになりたい（歌） 2. ぼくのミックスジュース（歌） 3. にじ（歌／手話つき） 4. さんぽ（合奏） 5. Believe（トーンチャイム） 6. 勇気100%（ダンス&パラバルーン）
平成 22年度	1. アヒルのダンス（ダンス） 2. アララの呪文（ダンス） 3. にじ（歌／手話つき） 4. となりのトトロ（トーンチャイム） 5. さんぽ（合奏） 6. 崖の上のポニョ（合奏）
平成 23年度	1. 崖の上のポニョ（トーンチャイム） 2. にじ（歌／手話つき） 3. 元気になれそう（合奏） 4. 風になる（合奏） 5. さんぽ（合奏）

また、音響面ではステージプロデュース部の学生の協力を得、照明等の工夫により音楽のみ

ならず視覚的にも効果的な舞台を作り上げることができた。

コンサートまでの過程において、練習等を通して学生間に結束力も生まれ始め、舞台に立つことの感動を全員で体験するとともに新たな課題が見つかるなど、この舞台体験は、後期の「音楽交流会」につながる位置づけとなっている。

(3) 後期の活動内容

後期に入ると、前期の活動内容をさらに発展させ、幅広い応用力や表現力を身につけることを目標に、表 3⁴⁾ に示す通り「音楽交流会」に向けての活動内容が中心となる。プログラムが確定すると演目ごとにグループ編成を行い練習を開始、全体練習では総合的視点から問題点、改善点を明確にし本番に向け全体をまとめ上げていく。前期と同じく、正規の授業以外にもかなりの時間を確保し取り組んでいる。

この時期、学生は幼稚園実習・保育園実習ともに体験済みであり、「音楽交流会」の内容についても、子ども達の視点に立った発想のもと活発な意見交換が行われ実習の成果が窺えた。

表 3 後期授業内容

授業回数	主な活動内容
16～17	園児との「音楽交流会」内容について検討 先輩の DVD 記録を視聴
18	プログラム確定 担当別グループ編成、練習計画立案
19～21	個人及びグループ練習
22～25	個人及びグループ練習、全体練習 小道具類製作 進行台本・プログラム等資料作成
26～28	全体練習
29～30	リハーサル

3. 実践経過

表 4 「音楽交流会」の概要

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
日 時	平成 22 年 1 月 22 日 (金) AM11:00 ~ PM12:00	平成 22 年 12 月 14 日 (火) AM9:40 ~ AM11:00	平成 24 年 1 月 24 日 (火) AM10:50 ~ PM12:10
場 所	本学ホール	本学ホール	本学ホール
招待園児	K 幼稚園年中児 66 名 S 保育園年長児 28 名 I 保育園年長児 26 名	K 幼稚園年中児 60 名 年長児 66 名	K 幼稚園年中児 79 名
内 容	【F ゼミ】 ミュージカル「森の音楽会」 【T ゼミ】 1. 歌：おひさまになりたい ぼくのミックスジュース 2. トーンチャイム： 崖の上のポニョ 3. ダンス&パラバルーン： アララの呪文 勇気 100%	【F ゼミ】 ミュージカル「不思議の国のアリス」 【T ゼミ】 1. ダンス：あひるのダンス アララの呪文 2. 合奏：崖の上のポニョ クリスマスメドレー 3. 歌：ひいらぎかざろう 赤鼻のトナカイ サンタが町にやってくる ジングルベル	【F ゼミ】 ミュージカル「ピーターパン」 【T ゼミ】 1. 歌&ダンス： 夢をかなえてドラえもん きのこ 2. 合奏：おもちゃのチャチャチャ おどるポンポコリン 3. ダンス&パラバルーン マル・マル・モリ・モリ
	【園児発表】 ○ K 幼稚園 歌：風はともだち ○ S・I 保育園合同 合奏：くるみ割り人形 サンバ・ブラジル	【園児発表】 ○ 歌： ・あしたははれる ・もしも季節がいちどにきたら ・上を向いて歩こう（手話）	【園児発表】 ○ 歌：きみのこえ

「音楽交流会」では、F ゼミとの合同ステージのため、内容が重複しないよう事前に打ち合わせを行い、調整を図っている。F ゼミではミュージカル、T ゼミでは歌唱・合奏・ダンスを中心とした構成になっており、各ゼミ 30 分程度のプログラム内容である。それに園児達の歌や合奏の発表が加わる。平成 21 年から 23 年の概要を表 4 に示す。

T ゼミにおいては、子ども達の嗜好を考慮しつつ、ともに楽しみ一体感を味わえることを基

本にプログラムを組み立てている。

歌唱については、明るく楽しい雰囲気のリズミカルな曲を好む傾向にあり、歌うことを中心に据えながらも簡単な振付を伴うことが多く、曲によってはポンポンやお面等の小物も製作、歌だけでなく視覚的要素も盛り込み音楽表現面での効果を上げている（図 1）。

合奏については、曲目に応じて音色・音質・音量等を考慮した演奏形態・楽器編成を考え、必要に応じて編曲を行うこともある。編曲につい

ては、主に吹奏楽経験者が担当、パート譜も作成する。担当楽器については、学生相互間で希望優先に決めているが、配慮事項として同一楽器に偏らないようにしている。担当楽器が決まると、個人及びグループ練習に入るが、練習過程において相互の演奏を聴き合い、楽器の組合せ、バランス、アンサンブルとしてのまとまり、楽器の配置等演奏上の問題点について意見交換を重ね改善を図る（図2）。



図1 歌（振り付き）



図2 合奏

トーンチャイムは、音楽療法でよく使われる楽器であるが、柔らかく優しい響き、澄んだ音が魅力であり学生達にも人気のある楽器である。

簡単に音が出せてみんなで楽しめるが、大人数になるほど奏者全員の協力がなければ演奏が成り立たない楽器でもある。まず、練習に入る前に、曲目内の各音数を数え、その音数によって単音か複数音のグルーピングを行い担当する音を決める。それから、合奏と同じく個人・グループ練習を経て全体練習に入るわけであるが、同じ音色・音質だけに、打ち方の強弱、残響の活かし方、音から音への受け渡しなど美しい音色をみんなで共有し、ひとつの音楽を創り上げるにはかなりの時間を要した。しかしながら、練習を重ねていく過程で、徐々に一人ひとりが分担した役割の責任を果たせるようになり、ハーモニーの響きを感じながらの演奏ができるようになった（図3）。



図3 トーンチャイム

ダンスについては、既成のものとオリジナルのものを組み合わせて構成することが多い。オリジナルについては、立候補による数名が振付を考え、みんなに指導する形をとる。前半がダンス、後半がパラバルーンの場合、ダンスからパラバルーンへのつなぎ方、パラバルーンを持ってくるタイミング等音楽の流れや動きを活かした振付に苦慮しているようである。授業時間内は、全体練習を中心とするため、授業時間

外に使用するCDを何度も聴いて音楽(メロディと歌詞)を覚え込むと同時に振付も習得することが個々に課せられる。全体練習では、お互いの動きを客観的に見るとともに、舞台を想定しての個々の立ち位置等配置の検討、小道具の有無、動作や表情等表現面全般についての話し合い、練習が繰り返された。その結果、タイミング感覚・スピード感・リズム感・表現力などを養うとともに、ひとつの形として仕上がっていった(図4~6)。



図6 パラバルーン&ダンス



図4 ダンス①



図5 ダンス②

その他、音響・照明関係は、前期と同じくステージプロデュース部の学生の協力を得た。

発表内容の練習と併行して、全体の流れに沿った司会進行や掲示物等会場設営、ポスター、プログラム(図7)等についても検討、準備を行うが、製作物については造形分野を得意とする学生が素案を作成、全員が製作に関わった。平成22年度については、開催月12月に合わせ「まつぽっくり」でクリスマスツリーを作り、園児へのプレゼントとした。



図7 プログラム

4. 実践結果

最初に述べたように、Tゼミは音楽に興味・関心のある学生が集まってはいるものの、クラスも違い初めて顔を合わせた学生もいる集団であり、前期当初は、周囲に遠慮しながら、様子を窺いながらの消極的な自己表現による活動開始であった。しかし、オープンキャンパスでのコンサートという具体的な目標を据えると、練習の過程において曲目ごとに得意とする学生達がリーダー性を存分に発揮するようになり、徐々に学生間のコミュニケーションが図られ学生個々の意欲や態度も高まったといえる。さらに、練習を通して相互に有益な刺激を与え合うことで、音楽技術面・表現面双方の力を伸長させることができた。オープンキャンパスでは、対象が高校生であるが、大きな舞台に立ち大勢の前で表現をするという体験は、後期の「音楽交流会」に向けて、主体的な音楽表現活動の基礎を培うとともに表現意欲を高める動機づけとなった。

園児が対象の「音楽交流会」では、常に子ども達を視野に入れ、子ども達と関わりながら一体となって進めていく方法をとっており、各年度とも学生個々の持ち味、特徴が活かされた内容となった。表4の概要には載っていないが、場面転換等曲間には手遊び等を取り入れ、導入から展開まで創意・工夫を行った。

本番までの過程において、回を追うごとに学生間で白熱した意見交換が行われ、空き時間を活用しての練習量も増加、それらに伴って結束力も一層強まり学生達の意気込みが感じられた。そして、照明・音響等舞台ならではの趣向を凝らした演出効果、表現力の向上など、音楽を中心とした総合的・実践的な力がより確かな

ものになっていった。

また、「音楽交流会」にふさわしい環境設定ということで、会場入口から会場内に至るまで飾り付けを行い、視覚的・感覚的に子ども達の期待感が高まるような雰囲気を作り上げた。

本番の舞台では、子ども達の歓声や明るく生き生きした表情に助けられ、また、学生の演奏に合わせて歌を口ずさんだり踊ったりと、音楽を体全体で受けとめ自由に表現をする子ども達の姿に後押しされて、練習の成果以上の力を発揮することができた。

学生達の発表後、子ども達が舞台に立って歌や合奏を披露（図8）、学生は客席へ移動し、子ども達の音楽を楽しみながら伸び伸びと元気よく歌っている姿、真剣な表情で演奏している姿、指導されている先生の姿など、それぞれの視点で演奏を聴いていた。最後には、子ども達一人ひとりから学生全員に手作りの首飾りが手渡され、感激の内に本番を終えた。



図8 園児による歌

このように、園児との「音楽交流会」は、子ども達を前にして、子ども達の反応を直接感じながら、ともに楽しい音楽表現活動を展開していく体験的学習の場として、学生個々の力量を高めるとともに、保育実践の場における音楽活

動の指導・援助の方法について考え、学ぶことができる貴重な機会となった。

5. 考察

園児との「音楽交流会」の実践を中心に述べてきたが、ここでは、その取組の成果や意義、課題について考察していく。

まず、前期では学生の主体的学習の基礎を養う取組を行い、さらに後期へ継続的に発展させ具現化する方向で授業を進めたわけであるが、学生達は様々な取組の過程において変容し続け、発展的体験学習としての「音楽交流会」は、予想以上の成果を上げることができた。

学生個々及び集団としての音楽技術の獲得、表現力の向上は勿論のこと、学生間のコミュニケーションの活性化や意欲的・主体的に取り組む探求姿勢が見られ、学生相互の音楽的感覚を刺激し受容し合うことで新たな発想、創造的な思考を促すとともに、個々の独自性を活かしながら潜在している能力や個性を引き出すことができた⁵⁾。

また、この取組の意義として、音楽のみならず他領域を網羅、幅広い教科目を包含している点を挙げることができる。例えば、台本作りや司会・進行は「保育内容・言葉」、小道具・プログラム・ポスター製作等は「造形表現」、ダンス・パラバルーンは「保育内容・表現」「幼児体育」、ホールでの発表に関する飾り付け等様々な取組は「保育内容・環境」、人間関係の調整・他者理解・コミュニケーションスキル等は「保育内容・人間関係」の領域に関係するなど、他領域との関連を図ることで感性と創造性が相乗的に高まり、総合的な表現力・応用力が養われたことは大きな収穫であった⁶⁾。

学びの集大成として、大勢の子ども達の前で

自分達の努力の成果を舞台上で発表する体験がもたらす感動は、自己表現と共同制作成就の瞬間であり、表現者という仲間意識のもとに仲間になる瞬間であり、その場にいる全ての人々が同じ価値観を共有する感動の極みの瞬間である⁷⁾。

練習過程において、数々の失敗や仲間との衝突など様々なことがあったが、他者との共同活動を通して、多くの問題や困難を乗り越え、それぞれに協力して一つのを完成させた達成感や感動はかなり大きかったようである。幾度とない意見交換、試行錯誤を重ねるうちに、頭で考えていたものが、実際に形となり目に見えるものとして完成していく過程に充実感や楽しさを感じ、結果以上に過程が重要であることを体験することができたこの取組の教育的意義は大変大きいと言えよう⁸⁾。

さらに、Fゼミと合同ということで、他者の発表を通して新たな気づきが生まれたり、表現の工夫やアイデアを発見したり、と有益な刺激を与え合うことができていた。ただ、現在は、個人レベルでの感想の述べ合いに終わっているため、きちんとした意見交換や相互批評を行うことで学生の意欲をより喚起させるとともに、さらにレベルアップや質の向上を図ることができるのではないかと考えられる。

今後は、「音楽交流会」を一年間の集大成としての舞台発表に限定するのではなく、幅広い場面で子ども達と交流できるような内容を視野に入れながら、学生達に創造的な音楽表現活動を体験させる場を多く提供していくことが課題である。音楽を取り入れた様々な活動を数多く体験させることは、知識・技能の育成に併せ、保育者として重要な資質である表現力の育成、ひいては子どもの音楽表現を読み取る力につながっていくと言えるであろう。

6. おわりに

発展的体験学習としての「音楽交流会」は、音楽に関する専門知識や技術・表現力の獲得は勿論のこと、人間教育の場にもなっていることを確かめることができた。他者との共同活動を通して得た責任感、協調性、課題を見つけ取り組む姿勢、主体性、積極性、忍耐力、自信など、「生きる力」を育んでいると考えられる。様々なことを体験し、壁にぶつかり、乗り越え、結束を強めながらひとつのものを仲間と創り上げる感動、達成感や喜びを共有する教材はなかなか存在しない⁶⁾。

今年度のTゼミでは、学生の希望もあり、早い段階での体験学習の機会を6月に計画、ミニ版「園児との音楽交流会」を舞台ではなく教室で実施した。授業が始まって約2ヶ月、その間2週間の幼稚園実習もあり、準備等練習不足のまま本番を迎え、緊張も加わって十分に力を発揮することなく問題点が露呈した結果に終わった。しかしながら、園の先生から具体的なアドバイスを得、学生達にとっては今後に向けての課題が明確となり、新たな目標が定まったようである。

2年という時間的に制限のあるなかでの音楽

表現活動ではあるが、学生が体験を通して表現の多様性を知り、音楽的着想の広がりにつながるような指導のあり方を今後も検討していくとともに、将来保育者として必要な音楽的資質を身につけ、子どもの主体的な音楽表現にふさわしい援助ができるような、保育者養成における音楽表現活動のあり方を模索していきたい。

引用・参考文献

- 1) 小池美知子、保育者養成における想像的音楽活動の一考察—授業実践を通して—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第11号、pp.58-65、2000
- 2) 小西由利子他、保育内容「表現」の中の「音楽的表現」教育に関する研究—学生の主体的学習態度の育ちと実践例を通して—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第10号、pp.68-77、1999
- 3) 京都文教短期大学平成23年度講義概要(シラバス)、p.194、2011
- 4) 伏見 強、ゼミにおけるミュージカル「不思議の国のアリス」制作・上演の成果、京都文教短期大学研究紀要、第50集、pp.125-134、2011
- 5) 富田英子、創造性を養う授業展開についての一考察—グループ学習活動を通して—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第15号、pp.53-61、2004
- 6) 望木郁代、創作ミュージカルによる教育効果の実証的研究、保育士養成研究、第28号、pp.31-39、2010
- 7) 福井 一・太田垣 学、総合的表現教科としての「ミュージカル」、奈良教育大学紀要、第47巻、第1号、pp.65-72、1998
- 8) 小森有子他、保育士養成校における「こどものための催し」に関する実践報告、保育士養成研究、第19号、pp.47-53、2001

